

〔付帯資料1〕

螺女山人著 成立年不明 『つれづれ飛日記』原文（井口洋他編 1982 『上方藝文叢刊8 上方巷談集』 上方藝文叢刊刊行会 所収 多治比郁夫校註「つれづれ飛日記」抄 pp. 338-341 による）

女すまふの事

一、 近頃、大坂のなんば新地ニおいて、女同士のすもうふを興行せし所に、殊の外ニはやりける由。追々のとりざたなれども、たとへよもや相撲はとるとも、女子がはだかには成まじとおもひ居たりしに、六月六日西洞院高辻の菅大臣の社内にて、女のすまふはじまりけるよし也。いかさま珍らしき事なればいで見んと行しに、土俵のかゝりすべて例のすまふにことならず拵へ、扱ひやうし木を打て土俵いりはじまる。真先に行司、是も女子也。桔梗のかたびらに茶の呂の上下を着し、唐團（唐團）を持て出る。其跡角力取、いづれも女也。本より丸はだかにふんどしして出る。東西ともに同じ。東の方行司は十五六の女。髪を若衆の如くに結ひて、緋ちりめん（緋ちりめん）に紋の付たるひとへもの、黒じゆすの上下を着して出たる所甚だきれい也。扱此すまふ取、いまだ見ざる以前に思ひしハ、女をはだかにしたらバ、ふんどしもふつごう成べし、ことにはぜんたいいやらしく、くにゃゝとして、おかしきものならんとおもひしに、扱も案ニ相違して、各其骨がらたくましく、まして男よりも尻大きくて、ふんどしの四ツ結のあふり至て見事也。かミは左右ともにびんを出し、つとハ出さず。只前髪のすまふとりに仕立、髻ハ鳴田に結ふて、元ゆひ沢山に巻たれば、其儘のすもふ取也。兎角におかしきは、ふたりの乳のふらゝ。また下に居てはだかる時にまたぐらがさびしひとて、ふんどしの内に綿をかためてきんたまを拵へしこそおかしけれ。扱すまふの手合は何れも手練無事故、双方立あふと其まゝいだし付て、押たをそゝとする斗り。されども女子同士の事なれば、よいかげんにして突出られて仕舞ひ、相對事ニ成てハけうすくなしとて、勸進元工夫して、勝たる者にハ褒美遣しけると也。依てほうびの錢をとらんとて、たがひに力を出しねぢあふハ、至つておかしくぞ見へし。然るに、寺町いづみ式部の寺内ニ而も、おなじく女のすもふはじまりしが、万事右にことならず。しかれ共菅大臣のかたハ、いづれも女小家のものども成よし。依て裸に成たる処、しこぶつにしてむさからず。和泉式部のかたハ惣嫁のよしにて、身うちに瘡などの跡あつて、むさゝ見苦敷きと人ミな申あへり。又下川原ニ而も女すまふはじまるとて、是ハ番付を売ありく。四条川

原ハ折から涼ミなれば夜中女すまふはじまりしが、これはかの辺新地の芸子などの中にて、気丈なものどもを撰りて出し申よし。其外御影堂の表門、正面の川原にてはじむるよし。此せつ諸方只女すもふのとりぎた斗り也。定めて追々方々にも出来ぬべし。また諸国よりも聞つたへて、大力の女ども出来りて、後々ハ女子の丸山、鬼がしまも出来らんとたのも敷ぞおもひはべる。近頃西陣不景気成折からなれば、定て此節ハいろ々めづらしきふんどし地を織出して、終に世界女すもうならんとすらんもおかしけれ。夫さへ有に盲目のすもふはじまり、是又大ひにはやり、大坂にてハ女と盲人と合せし由なれども、京都にてハ御免なく別にして致しけるが、双方ともにあたり、ことに女の方ハ終にさしとめられしが、盲人なれ共男だけ御構もなく、すゞみ中も河原にて興行して、大ひにはやりけれども、あらぬ事にてハ有ぞかし。

評

此頃女の相撲とりの風ぞくを見るに、菅大臣の方へ行もの共は、朝夕の往来を駕に乗せて出しけるを、いらざる事也と笑ふ人もあれど是ハ尤なるべし。すもふハとれども根が女の事なれば、道すがらも人にミられ、あれハすまふ取の女じやといはれんことをはぢての事成バ、少しやさしき所あれば也。それ程はづかしきをも、やむことを得ずして裸と成、ことさらふんどしまでして相撲をとりて、諸人に見せる事ゆへニめづらしといふもの也。依て見物ぐん集をなすべきの事也。然るに其後方々にすもふはじまり、其すもふとりの女、朝夕の往来道すがら少しもはぢず。髪角前髪に結ひなして、衣服は大嶋のかたびらをうでまくりし、羽織を折てかたに打かけ、染手拭を首にまき、すさまじき雪踏をはきてかたをふり、四五人も同じ輩つれ立、いかつらしくも高声にのゝしり歩行てい、少も女にハあらずして其いやしさいわんかたなし。しかれば是ハすまふとりの女也。されバ賞すべきものにハあらずして女のすたれもの也。すもふ取に於て、いかで男ニ増らんや。只女の情ハ有ながら、ぜひなく裸となり、すもふをとる処に於て一興有也。然れ共、詮たいすもふ取とならバ、何ぞこれを見るべくや。浅ましき匹夫也けり。元より女の、男のかたちやむことなくして世を渡るは、兼て御せいきんせらるゝ所也。神祭のねりものなど、色里の風俗にて女子を元ぷくさせるの類、これらとてもせまじき事なれども、其日に限る事ゆへ御免なし。然るに斯男のかたちに出立てはいくわゐるせば、など御咎めなからんやと思ひしうちに、はや大坂の女すもふのうち、高津新地の遊女に年来はながくと異名とりし力強の女ありしが、今度のすもふをさひわいとして、髪を実に男のごとくに先を切て半元服して角前髪と成、桔梗の大しまの帷子ニ黒ちりめんの羽織を、其儘むかしの濡髪長五郎成とて諸人のも

てはやせしと也。かやうの事より御咎有て、六月十日女すまふを御停止ニ仰付られしとなり。しかるに京都は此せつ最中なれば、追々に大坂より登り来りて、こゝもかしこも女すまふの御願ひを申上るに、当十二日都合九ヶ所より願出しと也。依て怪有に思召れて御ぎんミ有し所ニ、よからざる事とて、惣じて女すもふ今日より御停止被仰付て、所々のすまふも相やみけり。

現代語訳（雄松 1993a pp. 251-254 による）

『一 ちかごろ、大坂の難波新地で女同士のすもうを興行したところ、ことのほか流行った由である。いろいろわさを聞くが、たとえすもうを取るとしても、よもや女子が裸にはなるまい、と思っていたのだが、六月六日から、西洞院高辻の菅大臣の社内で女の相撲が始まった、と聞いたので、これは珍しい、是非見よう、と行ったところ、土俵の造作すべて普通の相撲と同じに作り、拍子木を打って土俵入りが始まる。真っ先に行司、これも女子である。桔梗の帷子に茶の絹の上下を着て、唐国扇を持って出る。その後に力士たちだが、いずれも女である。もちろん丸裸にふんどしをして出てくる。東西とも同じである。東方の行司は十五、六歳の女で、髪を若衆のように結び、緋縮緬に紋のついた単衣ものに黒縹子の上下を着て出たところは、はなはだ綺麗だった。さてこの相撲取り、力士たちだが、まだ見ぬまえに思っていたのは、女を裸にしたら、ふんどしも不都合だろうし、ことに全体がいやらしく、クニャクニャとして変なものだろう、と思ったのだが、さても予想と違って、各女力士たちは骨柄も逞しく、まして男よりも尻が大きいから、ふんどし四ツ結の「あふり」が至極見事である。髪は左右ともに鬢を出し、髷は出していない。ただ、前髪は相撲取り風に仕立てて、髷は島田に結っている。その元結いを沢山巻いていて、本当に男の相撲取りのようだ。とりわけおかしいのは、二人の乳房がぶらぶらすること。また、下の溜まりにいて胡座する時、股間が淋しいということで、ふんどしの中に綿を固めて入れ、「きんたま」を拵えているのもおかしい。さて相撲の手合わせは、どの女も特に手練はないので、双方立ち合うとそのまま抱き合い、押し倒そうとするばかりである。しかし女同士のことだから、そのうちに突き出されてしまって、それが打ち合わせ事になっては興味がそがれるので、勸進元は工夫して、勝った者に褒美をやるようにしたという。それでその褒美の銭をとろうとして、たがいに力を出してねじ合うのは、至っておかしきみえた。ところが寺町和泉式部の寺内においても、同様に女相撲がはじまったが、万事右と同じである。しかし菅大臣の方のは、女たちはいずれも小家の者だという。だから裸に

なったところは、逞しげで武骨に見え、むさくない。和泉式部の方のは、惣嫁だそうで、身体に瘡の跡などあり、むさくるしく見苦しい、と人々は皆、話し合っていた。また、下川原にも女相撲がはじまるという、これは番付を売りあるいた。四条川原は折しも夕涼み中なので、夜中に女相撲を始めたが、これはあの辺の新地の芸子等のなかで、気丈な者たちを選んで出場させているという。その他御影堂の表門、「正面」の川原でもはじめるという。当今あちこち、女相撲の噂ばかりである。きっと追追、方々に出来るのだろう。また諸国からも聞き伝えて、大力の女たちが出てきて、後々には女子の丸山、鬼ヶ島も出てくるだろうと、たのもしく思うのである。このごろ西陣も不景気な際であるから、多分この節はいろいろ珍しいふんどし地を織り出して、「終には世界女すもふならんとすらん」もおかしいことである。それさえあるのに、盲目の相撲がはじまり、これ又大いにはやり、大坂では女と盲人と合わせたそうだが、京都では許可が下りず別々にやったが、双方とも大当たりで、ことに女の方はついに差し止められたのだが、盲人とはいえ男ばかりのはおかまいもなく、涼み中も川原で興行して、大変流行したが、滅法なことである。

「評」

此頃の女の相撲取の風俗を見ると、菅大臣社へ行く者共は、朝夕の往来は駕籠に乗って通るのを、いらんことだと笑う人もあるが、これは尤もなことなのである。なぜなら、すもうは取るが根は女のことだから、道すがらにも人に見られて、あれは相撲取りの女だ、と言われるのが恥ずかしいからなので、すこしは優しいところもあるからである。それほど恥ずかしいのを、やむなく裸となって、ことさらふんどしまでして相撲を取って、諸人に見せることだから、珍しがられるのだ。それで見物も群れ集まるのだ。ところがその後方々に相撲がはじまって、其の相撲取の女たちは、朝夕の往来の道すがらにも、すこしも恥ずかしくなかった。髪は角前髪に結び、衣服は大島の帷子を腕まくりし、羽織りを折って肩に打ち掛け、染め手拭を首に巻き、あきれた物騒な雪駄をはいて肩を振り、四、五人も同輩が連れ立って、いかつい振りで声高にしゃべり歩くありさま、すこしも女らしいところがなく、品がなくて、なんともいいようがない。で、まあこれは相撲取の女だ、だから褒めたものではなく、女の役立たずである。相撲取といっても、とても男にはかなわない。ただ女としての情がありながら、やむをえず裸になって、すもうを取るということなら趣がある。ところが、そっくり相撲取になってしまうと、なんでそんなものがよいか。あさましい匹夫である。そもそも、女がやむをえず、男のさまをして世を渡すことは、以前から御禁制のことである。神社の祭りの練り物とか、また色里風俗で女を元服させる類は、

すべからざることなのだが、その日一日だけに限ることなので、別にお咎めもないのだが、このように男の姿で徘徊すれば、なんでお咎めのない筈があらうか、と思っていたところ、大坂の女相撲の内で、高津新地の遊女に、年来「はんがく」と異名を取った強力のおんながいたが、この度の女相撲を幸として、髪を本当に男のように先を切り、半元服のさまで角前髪となり、桔梗の大島の帷子に黒縮緬の羽織を着て、昔の「濡髪長五郎」そのままだと、人々が持て囃したという。こんなことでお咎めがあり、六月一〇日、女相撲は停止になったという。ところが京都の方は、そのころ真っ盛りの最中なので、続々と大坂からやって来て、あちこち至るところ、女相撲の認可を申し出て、この一二日、都合九ヶ所も願い出たという。それでお上は訝しく思われて御吟味があったのだが、よからざることだとし、総じて女相撲は今日から御停止を仰せ付けられ、諸所にあったものも廃止された。』

〔付帯資料2〕

増谷大梁・半井金陵 明和8年(1771) 『世間化物気質』

卷之三 第一 酒にみたるゝ易者の間に合ひ

(原文)(博文館編集部校訂 1895 『帝国文庫第30編 気質全集』 博文館 pp.595-597)

「酒のけいことて祇園町へ伴ひ騒ぎ樂しが。一座の中に。侍町人女郎一度に尋るには。先生様一生の中に名あげる事が易の表に見へませうかといへば。白山人とろつべきになつていひけるは。人間の禍福吉凶易に見へねば濟ぬ。三人共に名があげ度ばお侍はてんばな富の札買ふて見るがよし。貴公は馬のけいこ志たがよし。お女郎は力業を習ふたがよいといゝしかば。誠に心得先生のいわつしやることは神のごとし違ふことなして。町人の習はひでも大事な俄に馬のけいこして。物が入るに付ては親父が志かる。侍の仁躰らしう箕の尾の富はいふに及ず所々の富に入つて損するか。女郎はやさしきものなるに。力業をけいこするに付ては氣に入らぬ客があればとつてなげたり。或は引つかんであたすかんおいておくれとはね飛せば。客も氣味わるがり一度でこりて呼ねば。茶屋の亭主こまりはて。是は白山人様へねだりに行くに志くはなしと。錦の町の住宅へ案内乞へば。我より先へ六十ばかりの親父と侍が詰かけてのせりふ。さりとは先生には似合せぬ。貧乏人の恠に馬のけいこすれば名が上るとは其意を得ずとつめかける。侍は武士のいらざる富にこつてよつほど損致し。思へば是で名の上ることは有まじ。いかにと問ひ詰る尻馬にのり。亭主も此方抱の女郎力業を致すゆへ一向客はおち。とんと時花ず。あれがなんの名をあげる事有ふぞ。是でも易者でござる敷とつめ立てば。白山人にたゝ打うなづき。エ、聞へたゝ。日外茶屋の座敷でいふたのはおれもめれんで有たゆへ三人を取りちがへていふたの志や。ハテ侍なれば馬藝でも勝れると名が出る。又其許子息はかねてりやうりきもあり。かつぶくといゝ。角力好なれば。その好む所で名をあげたがよいといふこと。又女郎は苦界の身。是程つらいものはないと有るてんばな出世を待ふより外はないといふを。富でもいれて見たがよいといふと。其時は目はちろつく舌は廻らず。三人の身の事を三人に間違ふていふたの志や。易は變易といふてわるいがわるいに立つものじやない。年をこへたらよからふとあての違ふた返答も半分はいねぶり目。三人共に顔見合せ。先生一向やくたい。論なしといふて別れし翌年。かの侍大坂の毘沙門の富貳匁五分の札二枚

てんぽにかいしに。一十の富と五十番の軸とに當り百貳拾兩不時のもふけあり。彼息子は同じ大坂天王寺開帳に付て曲馬興行の太夫にかへられ。否丸と名をつけ殊の外繁昌して。女子子供も名を知やうになり。女郎も同じ大坂難波新地に女子の角力興行の關に抱られ。板額といふ關取三十日百五拾兩にて先銀取ば。三人なからわかれゝの悦びに。先生方へ一禮に行ば。いゝ合せたごとく親父も侍も亭主も一度に出合。今思ひ合せば先生の間違ふたとおつしやつたもやつぱり間違ひではない。易といふものはおそろしいものといへば。白山人まはらぬ舌に易を變易といふはそこじや。いふた事が一年か二年か五年か十年一生の内にはあはぬといふ事はない志や。何とおもちよいかおもちよないか。イヤおもしろふござりまする。おもちやいじや。おへもおもちよいと。やつぱりたわいなかりし。」

(現代語訳) (雄松比良彦 1993a 『女相撲史論』第二版：雄松比良彦『女相撲史研究』京都謫仙居 所収 pp. 230-231、二重括弧内は一階による補足)

「(前略) 酒の稽古に、弟子たちを祇園町に連れて行き、メートルをあげていると、一座のなかの侍・町人・女郎がこもごも尋ねて、先生様、一生のうちに名をあげることが、易の御表に見えましようか、というので、白山人、酔眼朦朧、人間の禍福吉凶はみな易に見える、三人ともに名があげたければ、まずお侍はてんぽな《運に任せるの意》富の札《今で言う宝くじ》を買ってみよ、貴公(町人)は馬の稽古をせよ、お女郎は力業を習うたがよい、といったので、三人はこれを素直に受け取って、先生のいわっしゃることは神のごとしというわけで、町人は習わんでもいい馬の稽古をにわかにならぬ、物入りにつけ親父に叱られる。侍は箕ノ尾の富はいうにおよばず、あちこちの富に入って損ばかり。「女郎はやさしきものなるに 力業をけい古するについては気に入らぬ客があればとつてなげたり 或は引つかんであたすかんおいておくれとはね飛せば 客も気味わるがり一度でこりて呼ねば茶屋の亭主こまりはて」《女郎はやさしくつつましいものであるのに、力業(この場合は相撲)を稽古しているので、気に入らない客があればとつて投げ、あるいはひつつかんで「あんた、好かんといっておくれ」とはね飛ばす。客も気味悪がって一度で懲りて(二度とその女郎を)呼ばないので茶屋の亭主は困り果てて》白山人にねだりにゆくにしくはなしと、錦の町の家へ行ってみると、先に六十ばかりの親父と侍がつめかけていて、先生らしくもない、貧乏人のせがれに馬のけい古すれば名があがるとは合点できません、とか、武士がいらざる富に凝ってよつぽど損をした、思えばこれで名のあがることはある

まい、いかにいかにと問い詰める尻馬に乗り、亭主もわたしの抱えの女郎が力業をいたすので一向客は落ち、とんと時花（はや）りません、あれが何の名をあげることになりました、これでも易者ですかいと角目立つ。白山人ニヤニヤと頷いて、わかったわかった、先日茶屋の座敷で言ったのは、酔っ払っていたので三人を取り違えて言ったのじゃ。侍は馬芸で名が出る、又（町人の親父に）其許のむすこは力も強くかつぶくもよく角力がすきななので、それで名をあげたがよいということ。又女郎は苦界の身。これほどつらいものはないとある。てんぼな出世をまつ他ないといふ、富（札）でも入れて見たがよい、といふ処を、目もしろつき舌もまはらず、三人にま間違ふていふたのじゃ。易は変易といふて、わるいがわるいに立つものじゃない、年をこへたらよからふ、と半分眠り目で答える。三人顔を見合わせて、先生一向やくたい《「やくたいなし」（役に立たない）の略》、話にならんといつて別れた翌年、かの侍は大坂のびしゃもんの富二匁五分の札二枚、てんぼに買って見たら、一匁の富《一等》と五十番の軸とに当たり、百二十両ぼろ儲けした。かの息子は同じ大坂天王寺開帳について曲馬《今で言うサーカス》興行の太夫にかかえられ、否丸（いやまる）と名乗りことのほか繁昌し、女子供にまで名を知られるようになった。女郎も同じ大坂難波新地に女子の角力興行の関に抱えられ、板額という関取となり、三十日百五十両の先銀取、三人ともどもの喜びに、先生方にお礼に行くと、親父も亭主も一度に来合わせ、今思えば、先生は間違ったと言われたがやっぱり間違いでない、易とはおそろしいもの、と言ったので、白山人まわらぬ舌で、易は変易といふたはそれじゃ、いふたことが一年か二年か五年か十年、一生のうちには合ぬといふことはない、「何とおもちよいか、おもちよないか」《何と面白いか、面白くないか》」

〔付帯資料3〕

女相撲関係新聞記事リスト（網掛け部分は本文・脚注中で触れなかったもの）

西暦	元号	月日	新聞名	見出し	備考
1884	M17	6.21	郵便報知	八坂新地の女相撲	
1897	M20	10.12	時事新報	女力士が拘引される	
1890	M23	11.8	讀賣新聞	二十餘名の女角力	
1890	M23	11.9	東京朝日新聞	大女	
1890	M23	11.10	讀賣新聞	回向院境内の女角力	
1890	M23	11.12	讀賣新聞	花櫓娘角力	
1890	M23	11.14	讀賣新聞	花櫓娘角力	
1890	M23	11.14	国民新聞	女相撲を回向院で興行	
1890	M23	11.15	讀賣新聞	花櫓娘相撲(昨日の続き)	
1890	M23	11.18	讀賣新聞	西洋人女相撲へ花を投與す	
1890	M23	11.18	讀賣新聞	女相撲ハ果報者	
1890	M23	11.19	讀賣新聞	女力士の酒量	
1890	M23	11.19	讀賣新聞	女相撲の行司	
1890	M23	11.20	讀賣新聞	技倆と自力ハ同じからず	
1890	M23	11.21	讀賣新聞	女相撲の思ひ立ち	
1890	M23	11.21	讀賣新聞	女力士の本籍體量年齢	
1890	M23	11.22	讀賣新聞	女力士の本籍年齢體量(昨日の続き)	
1890	M23	11.22	讀賣新聞	女力士の連中	
1890	M23	11.22	東京朝日新聞	娘相撲	
1890	M23	11.23	讀賣新聞	高砂屋の倅政次郎大に驚く	
1890	M23	11.28	東京朝日新聞	女相撲の停止	
1890	M23	11.28	東京日日新聞	女相撲の停止	
1890	M23	12.18	東京朝日新聞	女角力	
1891	M24	1.13	東京朝日新聞	女力士	
1891	M24	1.20	東京朝日新聞	力持の飛入	

西暦	元号	月日	新聞名	見出し	備考
1891	M24	1.28	東京朝日新聞	荒木小屋の興行	
1901	M34	1.21	讀賣新聞	手品と思ひのほかの女相撲	
1904	M37	11.6	讀賣新聞	もしほ草	
1906	M39	7.2	讀賣新聞	女相撲の保護願	
1911	M44	10.10	讀賣新聞	女相撲の自由廢業	
1913	T2	3.18	讀賣新聞	春の活動寫眞	
1913	T2	5.6	讀賣新聞	演藝	
1920	T9	9.12	讀賣新聞	貝杓子 女の職業	
1924	T13	7.4	讀賣新聞	女學生に相撲をとらせやうとし不信任を喰った教頭	競技？
1926	T15	3.22	讀賣新聞	書ぬき帳	
1926	T15	3.25 夕	東京日日新聞	ダンスと女相撲	
1926	T15	3.25	讀賣新聞	よみうり春秋	
1926	T15	3.25	東京日日新聞	日日講座 追はるる女相撲	
1927	S2	11.20	讀賣新聞	稀代な怪女	
1930	S5	6.21	東京朝日新聞	風変わりな渡米客 女相撲團や武者修行を乗せて春洋丸出帆	
1930	S5	6.21	東京日日新聞	「洋服も剣道の極意サ」と大麻教士賑かに鹿島立・女角力も春洋丸で初の洋行	
1930	S5	12.8	東京日日新聞	アメリカの水兵さんを双管で突ッ張り出したハワイ巡業の女相撲團 帰る	
1931	S6	8.12	讀賣新聞	合評「安さん劇」 男のエロ女相撲引込みの色氣	演劇
1943	S9	7.13	東京朝日新聞	地方雑信	民俗
1935	S10	2.22	讀賣新聞	明治婦人子供風俗紙上展覧会	
1936	S11	9.6	讀賣新聞	相搏つ乙女の意氣 異色・女子青年團の角力	民俗
1950	S25	5.6	讀賣新聞	女見世物 戦後版	
1951	S26	12.24 夕	毎日新聞	東京フィナーレ 金五十円也の女相撲 色氣のない残酷な世界	
1952	S27	1.8	内外タイムス	春場所女相撲	

西暦	元号	月日	新聞名	見出し	備考
1954	S29	4.1	佐賀新聞	県政の発展を祝福	民俗
1954	S29	5.16 夕	読賣新聞(大阪)	女場所	民俗
1962	S37	4.11	佐賀新聞	五年ぶり”女相撲出場”	民俗

〔付帯資料4〕

明治23年(1890)11月女相撲両国興行 初日の内容および星取表

(同年11月14日・15日讀賣新聞報道より)

土俵入り 力士の服装：半股引、肉襦袢、化粧回し、銀杏返し、化粧

相撲二番勝負六番

北海道きわ一東海道もと	1本目	北海道○(仏壇返し) ●東海道
	2本目	北海道●(背負投げ) ○東海道
	3本目	北海道○(同体取り直しの後、首投げ) ●東海道
日光山きん一鯨銚なゑ	1本目	日光山●(一本背負) ○鯨銚
	2本目	日光山○(背負投げ) ●鯨銚
	3本目	日光山○(突き出し) ●鯨銚
日高川くの一妹背山りん	1本目	日高川●(? (寄り)) ○妹背山
	2本目	日高川●(? (捻り)) ○妹背山
金龍山のん一入舟とり	1本目	金龍山○(踏切(勇み足?)) ●入舟
	2本目	金龍山○(櫓投げ) ●入舟
富士山よし一八丈島ゑん	1本目	富士山○(キツ返し(切り返し?)) ●八丈島
	2本目	富士山○(蹴返し) ●八丈島
妹背山りん一遠江灘たけ		「寄りで妹背山の勝ち」

大力腹櫓(妹背山)

「20貫目・22貫500匁・23貫目」(75kg・84.34kg・86.25kg)の土俵の上に力士
上乗り：金剛石きく

相撲二番勝負

富士山よし一東海道もと	1本目	富士山●(背負投げ) ○東海道
	2本目	富士山○(突き出し) ●東海道
		*軍配をめぐる紛糾あり
	3本目	富士山○(決まり手不明) ●東海道
北海道きわ一遠江灘たけ	1本目	北海道○(決まり手不明) ●遠江灘
	2本目	北海道●(決まり手不明) ○遠江灘

飛び付き三人抜き 勝者：妹背山

中入り

五人力（富士山）

歯力（遠江灘） 使用の土俵：「25 貫目」（93.75kg）

相撲甚句・手踊

二番勝負

飛付五人抜き（行司差し違いのため紛糾あり）

力持（妹背山）

腹の上に土俵六俵＋「32 貫目」（120kg）の搗臼を置き、餅を搗いて観客に提供

(付帯資料5 1 ページ目)

(付帯資料5 2ページ目)

(付帯資料5 3ページ目)

(付帯資料5 4ページ目)

(付帯資料6 1 ページ目)

(付帯資料6 2ページ目)

(付帯資料6 3ページ目)

(付帯資料6 4ページ目)

(付帯資料6 5ページ)

(付帯資料 7)